ヘンリッヒの最終見解

――『この自我は多くを語る』における自己意識理論――

櫻井　真文

はじめに

ディーター・ヘンリッヒ（1927-2022年）は、ドイツ哲学史におけるフィヒテ哲学の特異性を浮き彫りにした哲学者として知られており、そのフィヒテ解釈並びに彼自身の自己意識理論は、哲学研究者だけでなく一般読者に対しても自己探究への契機を与えてきた。とりわけ彼の主要論文である「フィヒテの根源的洞察（Fichtes ursprüngliche Einsicht）」（1966年、以下「洞察」と略記）[1]は、フィヒテの自己意識理論の独自性と射程を究明した記念碑的研究であり、公刊から約半世紀が経過した今でもなお、フィヒテ哲学を研究する際の必読論文と見なされている。とはいえ研究者の間では近年、「洞察」におけるフィヒテ解釈の妥当性を改めて検討する機運が高まっている。例えばS. Dürrはフィヒテとヘンリッヒの間の「反省」概念を巡る齟齬を指摘し[2]、S. Langは超越論的自我の自己定立における定立作用と定立結果の分離不可能性をヘンリッヒが捉え切れていないという批判を展開している[3]。すなわちヘンリッヒのフィヒテ解釈は、ヘンリッヒ自身の哲学的思惟が色濃く反映されたものとして、その妥当性が問題視されつつあるのである。

しかしこれらの批判は主として「洞察」に向けられており、晩年のヘンリッヒのフィヒテ解釈に向けれられたものではない、ということには注意が必要である。というのもヘンリッヒは、生涯にわたって知識学の改良に努めたフィヒテと同様、自らのフィヒテ解釈と自己意識理論の彫琢に取り組み続け、『この自我は多くを語る（*Dies Ich, das viel besagt*）』（2019年、以下『この自我』と略記）[4]においてフィヒテ解釈をめぐる最終見解を提示したからである。『この自我』では、「洞察」の

【註】

フィヒテのテクストは以下の版を用い、引用と参照に際しては、本文中に、略号、系列数・巻数、頁数の順に記す。J. G. Fichte, *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, hrsg. von R. Lauth, H. Jacob und H. Gliwitzky, Stuttgart-Bad Cannstatt 1962-2012. (GA)

1 D. Henrich, Fichtes ursprüngliche Einsicht, in: D. Henrich und H. Wagner (hrsg.), *Subjektivität und Metaphysik. Festschrift für Wolfgang Cramer,* Frankfurt am Main 1966, S. 188-232; in: ders., *Dies Ich, das viel besagt. Fichtes Einsicht nachdenken*, Frankfurt am Main 2019, S. 1-49.「洞察」からの引用と参照に際しては、本文中に2019年版の頁数を記す。

2 Vgl. S. Dürr, *Das Prinzip der Subjektivität überhaupt. Fichtes Theorie des Selbstbewusstseins (1794-1799)*, Paderborn, 2018, S. 275-299.

3 Vgl. S. Lang, Performatives Ich. Henrich über das Sich-Setzen des Ich in Fichtes „Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre“, in: M. Frank und J. Kuneš (hrsg.), *Selbstbewusstsein. Dieter Henrich und die Heidelberger Schule*, Berlin 2022, S. 245-266.

4 D. Henrich, *Dies Ich, das viel besagt. Fichtes Einsicht nachdenken*, Frankfurt am Main 2019.『この自我』からの

フィヒテ解釈の中心を占める三つの定式について註解が行われ、自己定立における定立作用と定立結果の区別という「洞察」時点の見解に関しても、変更が見受けられる。さらにヘンリッヒは『この自我』において「思弁的思惟」という新たな方法論を携え、満を持して、自己意識の根拠の探究に着手している。それゆえヘンリッヒのフィヒテ解釈を公平に評価するためには、『この自我』の検討は不可欠であると考えられる[5]。そこで本論考では、ヘンリッヒのフィヒテ解釈の変遷を追跡したうえで、ヘンリッヒの最終見解の妥当性を解明することを主題に掲げる。

以上の企図に基づき、論述は次の手順で行う。第一節では「洞察」に準じて、自己意識の「反省理論」の問題点を浮き彫りにした後、フィヒテの自己意識理論の三つの定式について理解を深める。第二節ではヘンリッヒが『この自我』において、遂行的解釈を用いて第一定式を修正するとともに、第二定式から発展させた「匿名的意識」理論を断念していることを確認する。第三節では、第三定式と関連する「思弁的思惟」に基づく形而上学の内実を明らかにしたうえで、その最終見解とフィヒテ自身の哲学との連関を解明する。

第一節　「洞察」における自己意識の根拠への批判的接近

「洞察」の考察は、デカルトからカントに至るまでの自己意識理論の欠陥を指摘した最初の哲学者として、フィヒテを取り上げることから始まる。ヘンリッヒに従えば、フィヒテ以前の近代の自己意識理論は「反省理論（Reflexionstheorie）」（10）として特徴づけられる。反省理論は「反省としての自我の本質」（９）に焦点を当てて、いかにして「自我は自我である」という自己意識が成立するのか、という問いへの回答を試みてきた。自我が自己自身を反省する際、反省主観としての自我と、反省客観としての自我との区別が生じる。ただし自我の自己反省においては、外的客観を認識する場合とは異なり、主観我と客観我は区別されるだけではない。むしろ自己反省では、反省する自我が自己自身をその反省の客観にするという仕方で、主観我と客観我の「同一性」（９）が成立する。反省理論の主唱者たちは、このような自己反省を徹底することを通じて、自己意識並びにその根拠を説明できると考えていたのである[6]。

しかしヘンリッヒに従えば、反省理論は自己意識の成立を十分に説明することができない。なぜなら反省理論は、「絶えず自己自身との循環の中で動いている」（10）からである。それでは反省理論はいかなる循環に陥っているのか。ここでヘンリッヒは二種類の循環、「存在論的循環」と「認

引用と参照に際しては、本文中に頁数を記す。『この自我』の1-49頁には、1966年出版時の「洞察」がそのまま収録されており、51-301頁でヘンリッヒの晩年の解釈が展開されている。

5　なおDürrも近年の書評において『この自我』を検討し、ヘンリッヒの晩年の主要関心が自己意識における普遍性と個別性の連関規定にあったことを指摘している。S. Dürr, Dieter Henrich. *Dies Ich, das viel besagt. Fichtes Einsicht nachdenken*, in: *Fichteana. Review of J. G. Fichte Research* (22) 2022, pp. 41-53.

6　カントを反省理論の代表者に数え入れるヘンリッヒの見解に対して、H. F. Klemmeは異論を唱えている。H. F. Klemme, „Eigentliches Selbst“（I. Kant）oder „ursprüngliches Selbstsein“（D. Henrich）? Über einige Merkmale von Kants Begriff des Selbstbewusstseins, in: G. Motta und U. Thiel（hrsg.）, *Immanuel Kant: Die Einheit des Bewusstseins*, Berlin/Boston 2017, S. 258-276. Klemmeに従えば、カントもまた反省理論が循環的説明に陥らざるを得ないことを十分に把握しており、その循環的説明を回避するために、『純粋理性批判』において超越論的統覚と経験的統覚とを峻別して論証を展開したのである（vgl. S. 264-270）。

識論的循環」に言及する[7]。第一に存在論的循環とは、自我は、反省主観として自己反省に取り組むのに先立ち、すでに現前していなければならない、というものである。もし自我が主観＝客観としての直接的意識を伴って存在していなければ、そもそも反省を開始することさえできないであろう。第二に認識論的循環とは、自我は、反省客観としての自我が、他でもない反省主観としての自我と同一であるということを予め認識していなければならない、というものである。「この主観はまた、その客観が主観自身と同一であるということを知っていなければならない」(11)。反省理論は、反省を通じて自己意識の説明を試みるが、そもそも主観＝客観の直接的意識を前提していなければ、主観我と客観我は区別されたままに留まり、同一になることはない。ヘンリッヒはこれら二種類の循環に言及することで、反省理論が自己意識の同一性を前提としたうえでしか成立しないという欠陥を抱えていることを明らかにしたのである。

ヘンリッヒによれば、この反省理論の問題点を見抜くのみならず、それに対抗する構想概念を提起した人物がフィヒテである。「フィヒテはこの循環を認識し、そこから諸結論を導き出した最初の人物であった」(12)。フィヒテは「自我の自己定立(Sich-*Setzen* des Ich)」(16)に焦点を絞り、自我の本質をその「産出活動(Produktion)」(17)の内に認めたうえで、独自の自己意識理論を展開していく。ヘンリッヒはその自己意識理論を三つの定式に分類し、まずフィヒテの『全知識学の基礎』(1794/95、以下『基礎』と略記)時点での根本思想を、次の定式の内に指摘する。「自我は端的に自己自身を定立する(Das Ich setzt schlechthin sich selbst)」(15; GA I/2, 260f.)。この「第一定式」(19)では、定立する自我が何らの先行する存在者を前提すること無しに、自己定立を遂行することが表現されている。この自己定立は端的に無制約的に起こるがゆえに、それに対していかなる知も先行することのない直接的作用である。自我の自己定立では主観我と客観我は常にすでに同一のものとして考えられており、自己定立において「全自我(das ganze Ich)」(16)は一挙に現れるのである。

しかしヘンリッヒは、フィヒテの第一定式が反省理論の欠陥をなお引き継いでいることを指摘する。というのも第一定式では、自我の無制約的な定立作用と、その定立結果である主観＝客観としての自己意識との区別、換言すれば、産出活動と「産物(Produkt)」(17)との区別が残り続けることになるからである。ヘンリッヒによれば、自己意識としての「知は産出活動に基づき初めて成立すべきである。しかしそれでもわからないのは、産出活動が私たちに衝突することに基づき、いかにして私たちが知を理解可能にできるのかということである」(18)。たしかに第一定式では、自我の端的な自己定立が自己意識をもたらす、という構図が確認された。しかし、産出的な自己定立が自己意識をいかにして成立せしめるか、という問いは未解決のままに残されることになる。そして自己定立と自己意識の関係を究明することは、ヘンリッヒ自身の自己意識理論の生涯の課題となるのである。

さてヘンリッヒの「洞察」時点の見解に従えば、フィヒテは先の問いへの最初の回答をイェーナ期後期の1797年に「第二定式」、すなわち「自我は自己を端的に、自己を定立するとして定立する(Das Ich setzt sich schlechthin *als* sich setzend)」(19; GA I/4, S. 276.)において提示した。第二定式では、定立する自我が、客観我を単に定立されたものとしてではなく、自己定立するもの「と

[7] 「存在論的循環」と「認識論的循環」という名称の分類は、Dürrの解釈に負うものである(vgl. Dürr, *Das Prinzip der Subjektivität überhaupt*, S. 280)。

して」定立することが明示されている。それゆえ第二定式における定立する自我は、主観＝客観の直接的意識を携えており、しかも「直観（Anschauung）」（21）としてのみならず「概念（Begriff）」（21）としても携えている。ヘンリッヒの『この自我』での註解に従えば、第二定式の自己定立の内には「初めから概念的契機、それどころか命題的契機さえも」（76）が持ち込まれており、「この契機によって自我は自己をそのようなものとして、つまり自己を思惟する形式において、しかもこれまた直接的に、理解することができる」（76）。ヘンリッヒの解釈に従えば、フィヒテは第二定式を通じて、自我の自己定立の内には直観と概念という両契機が不可分に結びつけられていること、しかもその結合が時間的な前後関係ではなく、いわば「等根源的（gleich ursprünglich）」（22; GA I/3, 253）なものであることを説明した。第二定式では、自己知の側面に焦点があてられることで、自己定立と自己意識の共属関係が鮮明に描き出されたのである。

とはいえヘンリッヒの見立てでは、第二定式によっても、自己定立と自己意識の関係は十分に説明されたとは言い難い。なぜなら第二定式では、自己定立における直観と概念という両契機――イェーナ期知識学の術語法に当てはめれば、「知的直観」（GA IV/3, 350）と「自我の概念」（GA IV/3, 349）という両契機――の等根源的な在り方が示されたものの、この互いに還元不可能な両契機がいかなる仕方で自己意識を成立させているのか、という問いは依然として残り続けるからである。私たちはこの問いに答えるために、自己定立に初めから含まれている概念的契機の一層深遠な根拠を問う必要がある。「かくして、活動的自我に先立ち活動的根拠――そこから自我の諸契機の等根源的統一が説明されるが、しかし自我においては現前へと至らない活動的根拠――を思惟する、という思想が形成される」（23）。ヘンリッヒに従えば直観と概念の等根源性は暫定的回答に過ぎないため、その等根源性を成立せしめる活動的根拠を、哲学者は追究しなければならない。それではフィヒテは結局のところ、自己意識の説明根拠をいかなる点に求めたのか。

ヘンリッヒは1801年の知識学に登場する「第三定式」、すなわち自己意識は「眼が組み込まれている活動（eine Tätigkeit, der ein Auge eingesetzt ist）」（23）であるという定式の内に、自己定立と自己意識の関係を巡るフィヒテの回答を見出す。さしあたり第三定式で注目すべきは「眼」の比喩である。ヘンリッヒに従えば、一方で、この眼は自我の自己定立を後追い的に注視するものであり、その限りで「認識の根拠」（24）である。他方で、この眼は「概念を通じて行いを導く」（25）という機能を備えており、自己定立に先立ち自己定立を先導的に規定する限りでは「道徳的行為の根拠」（25）である。そのため第三定式の眼の比喩は、第二定式の前反省的な知的直観を示すためだけに導入されたものではない。むしろフィヒテは眼の比喩を用いることで、自己定立には概念的契機が必然的に含まれていることを一層明瞭に打ち出したのである。

さらに第三定式で重要であるのは、「組み込まれている（Eingesetztsein）」（25）という表現である。ヘンリッヒによれば、自己定立に眼が組み込まれているという表現は、一方で、自己定立が常に眼と共にしか成立しえない、ということを適切に示すものである[8]。他方で、「組み込まれている」という状態受動の表現は、自己意識の現時点での経過様式を示すものにすぎず、「何によって」「いかなる仕方で」自己定立に眼が組み込まれているのか、という問いへの余地を残すものである。『この自我』の註解に従えば、実際フィヒテは1801年の知識学において自己意識の更なる根

[8] 『この自我』では「組み込み（Einsetzen）」が「移植作用（Implantieren）」ではなく「設立作用（Instituieren）」であり（vgl. S. 190）、設立作用では自己定立と眼が一挙に生起することが説明されている（vgl. S. 118）。

拠の探究に乗り出しており、その後は自己意識を「『絶対者』の顕現（*Manifestation* eines ‚Absoluten‘）」として捉え直すことになる（168）。すなわち、第三定式も自己意識理論としては不完全である、というのが「洞察」時点のヘンリッヒの見解であった。そこでヘンリッヒは「洞察」以降、フィヒテの自己意識理論の三つの定式をさらに批判的に検討するのみならず、彼独自の自己意識理論の彫琢に乗り出したのである[9]。

第二節　『この自我』における自己註解：遂行的解釈と匿名的意識理論

ヘンリッヒは晩年に出版した『この自我』において、「洞察」の意義並びに問題点を自ら解説するのみならず、当時のフィヒテ解釈を修正する。その中でも興味深いのは、ヘンリッヒが第一定式と第二定式に関する解釈を軌道修正している点であり、この軌道修正が、自己意識の根拠を改めて探究するための準備的役割を果たす点である。それではヘンリッヒは具体的にいかなる軌道修正を施したのか。本節では順を追って、ヘンリッヒによる第一定式と第二定式に関する解釈の変更点を解明していくことにする。

さしあたりヘンリッヒは、第一定式では定立作用と定立結果の区別がなお残り続けているという「洞察」時点の解釈を修正する。「そのうえ定立作用の遂行は、そこから出発されることができる、定立結果の生起から分離されることはできない。その限りで、定立作用の遂行は遂行的である。つまり、定立作用が遂行されているのと同時に、その定立結果も直接的に生起した、というわけである」（74）。この引用箇所では、「自我は端的に自己自身を定立する」という第一定式において、定立作用が、定立結果である自己意識を携えて直接的に生起すること、しかもそれが「遂行的（performativ）」（74）な仕方で一挙に起こることが説明されている。自己定立が遂行的であるとは、発話の時点でその動作を行ったことになる遂行動詞のように、定立する時点で定立結果としての自己意識が常にすでに生じている、という事態を指し示している。晩年のヘンリッヒは、第一定式に関する「遂行的解釈」を採用することで、定立作用と定立結果の区別が残り続けるという困難の回避を試みる。それでは、ヘンリッヒの遂行的解釈はフィヒテ自身の説明にどれほど合致しているのか。

『基礎』の「第一部」における自己定立の説明に焦点を絞るならば、遂行的解釈は妥当であると考えられる。なぜなら『基礎』では再三にわたり、定立作用と定立結果の分離不可能性が強調されているからである。「自我は行為者であると同時に、行為の産物である。行為と事実は唯一同一である」（GA I/2, 269）。フィヒテに従えば、自我の自己定立の内には、定立作用とその産物が互いに分離不可能な構成要素として含まれている。自己定立では、定立作用の後に自己意識が成立するのでも、自己意識を前提として初めて定立作用が生じるのでもなく、両構成要素が「事行（Tathandlung）」（GA I/2, 261）として一挙に生起するのである。それゆえ「自我は自己自身の存在

9　「洞察」の問題構制と、ヘンリッヒの1980年代までの哲学的考察の展開については以下参照。H. Gutschmidt, Die frühe Selbstbewusstseinstheorie Dieter Henrichs. Mit einem Ausblick auf die weitere Entwicklung, in: M. Frank und J. Kuneš（hrsg.）, *op. cit.*, S. 21-42. ヘンリッヒの哲学的方法論と主要関心の移り行きを考慮に入れたうえで、彼の主観性理論の根本特徴を解明する著作としては以下参照。H. Gutschmid, *Dieter Henrichs Theorie der Subjektivität. Analyse ihrer Entwicklung*, Hamburg 2024.

を根源的に端的に定立する」(GA I/2, 261)という第一根本命題における、「根源的に(ursprünglich)」という副詞は省略されるべきではない。フィヒテは自己定立の根源性ということで、定立作用が定立結果に時間的に先行することを表現しているのではなく、定立作用と定立結果の分離不可能性が――少なくとも『基礎』においては――それ以上遡及不可能な根源的事態であることを表現している[10]。したがって『この自我』における第一定式の遂行的解釈は、フィヒテの「事行」理解を適切に踏まえたものである、と見なされることができよう。

次にヘンリッヒは「自我は自己を端的に、自己を定立するとして定立する」という第二定式をめぐる解釈についても態度変更を表明する。ヘンリッヒは「洞察」以後に第二定式を独自に発展させ、1971年のハンブルク講義では自己意識理論を「自我中心的な(egologisch)」ものと「没自我的な(ichlos)」ものに分類し、後者の優位を主張した[11]。第二定式に端を発する自我中心的な自己意識理論とは、自己定立における直観と概念という両契機の連関を、あくまで自己意識の限界内で探究する理論である。この自己意識理論では、自己意識の構成要素並びにその関係の仕方が解明されるにしても、自己意識の外部が取り扱われることはない。それに対して、70年代のヘンリッヒが推し進める没自我的な自己意識理論では、構成要素の関係そのものを成立せしめる「匿名的意識(das anonyme Bewusstsein)」[12]が主題化されることになる。それでは、匿名的意識と自己意識はいかなる関係にあるのか。

ヘンリッヒに従えば、自己意識に対して、匿名的意識は「領野(Feld)」[13]として先行している。この領野は「第一義的に連関であり、諸構成要素から導出されることはできない」[14]。すなわち、自己意識の成立に先立ち匿名的意識の領野が存在し、この原初的な匿名的意識を通じてしか主観＝客観としての自己意識は成立しない、とヘンリッヒは考える。それゆえ匿名的意識理論では、定立作用を自ら主体的に遂行する「自我」の役割が格下げされることになる。なぜなら、たしかに自我は定立作用を遂行することでしか自己意識を確実なものにできない一方、他方で自我は匿名的意識を自由に使用できる身分にはなく、匿名的意識に対して受動的に振舞わざるを得ないからである。70年代のヘンリッヒにとって、自己意識の根拠は自我の支配下にはない匿名的意識であった。とはいえ、自己意識を踏み越えた領野を匿名的なものとして独断的に想定するヘンリッヒの見解に対しては、フィヒテ研究者側から次のように問い質されもしよう。フィヒテなら自己意識の根拠を非我の内に、もしくは自我でも非我でもない「それ(es)」の内に認めるだろうか、と。

実際ヘンリッヒは80年代以降、匿名的意識理論から次第に距離を取るようになり[15]、『この自我』

10　ヘンリッヒに先立ち第一定式の遂行的解釈を展開したのがLangであり、その解釈の要点は本論考の註3に挙げた論文において説明されている。Vgl. Lang, *op.cit.*, bes. S. 259-264.

11　Vgl. D. Henrich, Selbstsein und Bewusstsein mit einer neuen Einleitung, in: *e-journal Philosophie der Psychologie* (8), 2007, S. 1-19. http://www.phps.at/texte/HenrichD1.pdf. 最終閲覧日、2024年6月2日。

12　D. Henrich, Selbstbewusstsein. Kritische Einleitung in eine Theorie, in: R. Bubner, K. Cramer und R. Wiehl (hrsg.), *Hermeneutik und Dialektik*, Bd. 1, Tübingen 1970, S. 275.

13　Henrich, Selbstsein und Bewusstsein, *op. cit.*, S. 10.

14　*Ibid.*

15　ヘンリッヒは匿名的意識理論からの離反を次の著作において初めて表明した。D. Henrich, *Fluchtlinien. Philosophische Essays*, Frankfurt am Main 1982. 他方でM. Frankは現在も匿名的意識理論を強く支持している。M. Frank, Ist Selbstbewusstsein ein ‚anonymes Feld' oder eine ‚wissende Selbstbeziehung'? Dieter Henrichs zwei Theorien zur Verteidigung von Selbstbewusstsein, in: M. Frank und J. Kuneš (hrsg.), *op. cit.*, S. 69-

では匿名的意識理論を支持していないことを表明する。「自己意識の閉鎖性の根拠は、その内で自己意識が登場する次元の彼岸にしか――それゆえまた精神性と知性の陶冶の彼岸にしか――見積もられることができない。しかし、その根拠はこの閉鎖性に対して構成的意義を持つがゆえに、その閉鎖性との関係において、全く通約不可能な地位を持つことはできない」(189)。ここでヘンリッヒは自己意識の彼岸に想定される根拠が、自己意識と通約可能な地位にあることを指摘することで、匿名的な「それ」が根拠である可能性を斥けている。また『存在もしくは無(*Sein oder Nichts*)』(2016年)では、一層明瞭な言い回しで、匿名的意識理論が拒否されている。「自己意識は匿名的プロセスにおける自己知(Wissen von sich)ではない。自己意識は私の知(Wissen von *mir*)として根源的に遂行されなければならない」[16]。すなわち晩年のヘンリッヒは、自己意識の根拠を自我論の枠組みで探究する方向に再び舵を取るのである。もっともヘンリッヒは、他の誰でもない「この自我(dies Ich)」による自己定立の遂行を重視するものの、第一定式に基づく自我論に回帰することはない。むしろヘンリッヒは、第三定式を踏まえて自我論を拡張することでしか、自己意識の一層深遠な根拠を洞察できないと考える。それではヘンリッヒはいかなる最終見解を提示するのか。これについては、節を改めて検討していくことにする。

第三節　ヘンリッヒの最終見解としての「思弁的形而上学」

晩年のヘンリッヒは、「何によって」「いかなる仕方で」自己定立に眼が組み込まれているのか、という第三定式に基づく問いに導かれる仕方で、自己意識の根拠の探究に再び取り組んだ。ヘンリッヒに従えば、ここでの根拠の探究は「『形而上学』という旧来の理論的名称の遺産」(268)であり、自己意識の限界を超える領野にその根拠を探究する営みである。ただしヘンリッヒはここで形而上学を引き合いに出すことで、キリスト教神学や神秘主義を自我論に持ち込もうとしているわけではない。むしろヘンリッヒは1801年以降のフィヒテに倣い、自己意識の根拠を超越的なものに希求することに対して慎重な態度を崩さない。「フィヒテは神の自己顕現という思想への移行において、かつて自らが根源的洞察という契機において洞察したところの自己関係の統一についての解明を、超越的機関に委譲することができないし、そうしようともしない」(187f.)。すなわちヘンリッヒは、自己意識の根拠を安易に神に委譲しないフィヒテや、純粋理性に基づく新たな批判的形而上学の構築に努めたカントと同様の発想で、超越主義と一線を画した独自の形而上学を「思弁的形而上学(spekulative Metaphysik)」[17]として構想するのである。それでは思弁的形而上学とはいかなる学か。

さしあたりヘンリッヒによれば、思弁的形而上学では「思弁的思惟(spekulatives Denken)」(191)を通じて自己意識の根拠が探究される。思弁的思惟は、客観認識の地平を超え出た思惟であり、その本質は無制約的なものを捉えることの内にある。私たちは思弁的思惟を働かせることで、自己意識の無制約的根拠に接近することが可能となる。とはいえ思弁的思惟は、自己意識の

95. もっともFrankが匿名的意識理論を擁護する際に引き合いに出すのはサルトルであり、フィヒテではない (vgl. S. 85-91) 。

16 D. Henrich, *Sein oder Nichts. Erkundungen um Samuel Beckett und Hölderlin*, München 2016, S. 205.

17 *Ibid.*, S. 446.

根拠を一挙に看取する思惟でもなければ、その根拠を自由自在に案出する思惟でもない。ヘンリッヒは『思惟と自己存在(*Denken und Selbstsein*)』(2007年)[18]で、思弁的思惟の四つの特徴を説明している。第一に思弁的思惟は「総合的(synthetisch)」[19]である。なぜなら思弁的思惟は主観にとって所与的な全てのものを超え出た領野に、その主観性の根拠を求めるからである。思弁的思惟の相関物が現実世界に生起することはない。第二に思弁的思惟は「要請的(postulierend)」[20]である。というのも思弁的思惟では、真理を記述的に証明することは重要でないからである。思弁的思惟は、その方法論が首尾一貫的であると示すことはできても、そこで思惟された根拠が客観的真理であると証明することはできない。「思弁的思惟は決して証明することができない。しかしそれにもかかわらず、思弁的思惟は自らの行程を基礎づけることが可能であり、その歩みを方法論的に秩序付けることが可能である」[21]。第三に思弁的思惟は「改訂的な概念形式(revisionäre Begriffsformen)」[22]を持たなければならない。なぜなら思弁的思惟は、客観認識とは全く異なる思惟方法だからである。思弁的思惟を推し進める際には、従来の形而上学のように理論理性に頼るのではなく、実践理性に基礎をもつ理念論を展開する必要がある[23]。ヘンリッヒに従えば、哲学者は思弁的思惟という「方法論的制御(methodische Kontrolle)」[24]の下でのみ、自己意識の根拠に接近可能なのである。

しかし思弁的思惟という方法論だけでは、自我が自己意識の根拠を独断的に想定する危険性を排除することはできない。むしろ、思弁的思惟であることを盾に取り、自己意識の根拠を安易に超越的領野に求めることは――70年代のヘンリッヒ自身の匿名的意識理論の内に見受けられるように――十分にありうる。そこで晩年のヘンリッヒは、そのような思弁的思惟の越権を防ぐために、思弁的思惟が「自覚的生(das bewusste Leben)」(267)に対してのみ適用されるべきであることを主張する。自覚的生とは、自我が他の誰でもない個体である「この自我(dieses Ich)」(IX)として、生を引き受けるということである。ここでヘンリッヒは明らかに、有限的存在者としての自我に備わる個体的自己意識の代替不可能性に着目して、根拠の探究を進める。それゆえ思弁的思惟は、いわゆる講壇哲学が好む議論のように、生の地平と乖離した思弁を展開すべきではない。そうではなく、思弁的思惟は自覚的生の主体によって、いわば「自分事」として遂行されるべきであり、あくまで自己意識の限界上での、自己意識の根拠の探究たるべきである。これと関連してヘンリッヒは、思弁的思惟の第四の特徴が「外挿的(extrapolativ)」[25]であることを指摘する。「この思弁的思惟は、帰還と上昇において主観性を超え出るにもかかわらず、主観性がすでに自由に使用できる資源以外のいかなる資源も、その超出のために利用することはできない」[26]。すなわち、

---

18 D. Henrich, *Denken und Selbstsein. Vorlesungen über Subjektivität,* Frankfurt am Main 2007.

19 *Ibid.*, S. 253.

20 *Ibid.*

21 *Ibid.*, S. 274.

22 *Ibid.*, S. 254.

23 Kunešはヘンリッヒが採用する「思弁的思惟」が、カント実践哲学の理念論に由来する方法論であることを指摘している。Vgl. J. Kuneš, Rückgang in den Grund. Zu späteren Veröffentlichungen Dieter Henrichs über das Selbstbewusstsein, in: M. Frank und J. Kuneš (hrsg.), *op.cit.*, S. 62f.

24 Henrich, *op.cit.*, S. 273.

25 *Ibid.*, S. 272.

26 *Ibid.*

思弁的思惟において接近可能な根拠は、自我の主観性という「極（Pol）」を基準にして想定される根拠であり、その限りでどこまでも「自我的な」根拠である。かくして晩年のヘンリッヒは、主観性の哲学者として、自覚的生の立場から思弁的思惟を用いることで自己意識の根拠を探究し、その思弁的形而上学の構築を現代哲学の課題として提示したのである。[27]

以上より、ヘンリッヒがその最終見解として示した思弁的形而上学の全体像が明らかにされた。それでは、このようなヘンリッヒの自己意識理論はフィヒテ解釈としてどの程度まで妥当であるのか。さしあたり、ヘンリッヒとフィヒテの両者に共通するように見受けられるのは、哲学探究を行うのは他の誰でもないこの自我である、という遂行的意識を高く評価している点である。晩年のヘンリッヒは自己意識の根拠を探究する際にも、定立作用と定立結果の分離不可能性というフィヒテの「事行」理解を、絶えず念頭に置いているように思われる。知識学あるいは思弁的形而上学に取り組むのは、あくまで一人称としての自我に他ならないからである。また両者は自己意識の根拠を、自己意識を超える領野に希求するという形而上学的欲求を排除しないことにおいても、共通点をもつ。フィヒテは『人間の使命』（1800年）の「第三部」において、有限的存在者の意志からも、『新しい方法による知識学』（1796-99年、以下『新方法』と略記）における純粋意志からも質的に区別される意志、すなわち「いかなる名前ももたず、いかなる概念も包括しない」（GA I/6, 296）超越的意志を論じるに至った。[28] 晩年のヘンリッヒも自己意識の根拠を形而上学的次元に求めるからこそ、その形而上学的行程を正当化しうる「思弁的思惟」を論じたのである。

とはいえ、両者の哲学的関心の差異は見過ごされるべきではない。晩年のヘンリッヒは「眼が組み込まれている活動」という第三定式の内に「自己定立の放棄（die Preisgabe der Selbstsetzung）」（232）を読み取り、そのようなフィヒテに対抗する構想概念として、個体的自己意識を重視する思弁的形而上学を展開した。「私はその論文［「洞察」］においてフィヒテの第三定式を個別的自己意識の命題として把握した」（195、［　］内は筆者による補足）。しかし検討の余地があるのは、フィヒテが自己定立を1801年以降の知識学において本当に放棄したのか、また、個体的自己意識を取り扱っていないのか、ということである。むしろフィヒテは一人称的な個体的自己意識を方法論的に抽象するという仕方で取り扱い、それを通じて自己意識の普遍的形式を究明しようとしたのではないだろうか。[29] さらに言えば、晩年のヘンリッヒのフィヒテ解釈には、知識学を「自由

27　ヘンリッヒの思弁的形而上学の詳細に関しては以下参照。Vgl. D. Henrich, Die philosophische Theorie im bewussten Leben, in: ders., *Sein oder Nichts*, *op.cit.*, S. 428-461.

28　『新方法』から『人間の使命』への意志論の展開については以下参照。J. R. de Rosales, Das Göttliche. Der Atheismusstreit und die Wende im Denken Fichtes, in: *Fichte-Studien* 44 (2017), S. 31-48. また『人間の使命』「第三部」の論証行程については以下参照。D. Breazeale, Jumping the Transcendental Shark. Fichte's "Argument of Belief" in Book III of *Die Bestimmung des Menschen* and the Transition from the Earlier to Later *Wissenschaftslehre*, in: D. Breazeale and T. Rockmore (ed.), *Fichte's Vocation of Man*, *New Interpretive and Critical Essays*, New York, 2013, pp. 199-224. この論文でBreazealeは「第三部」の論証が、超越論哲学の枠組みを踏み越えたものであると指摘している。

29　Stolzenbergは、晩年のヘンリッヒによるフィヒテ解釈もまた一面的であることを指摘し、「絶対的存在」に関してもイェーナ期知識学の「純粋我」との連関において理解されるべきであることを明快に論証している。J. Stolzenberg, Subjektivität und Metaphysik. Dieter Henrich – Wolfgang Cramer – Fichte, in: M. Frank und J. Kuneš (hrsg.), *op.cit.*, S. 285-310. Stolzenbergの批判的読解に従えば、フィヒテの自己意識理論が「知の根本定式の超越論的理論」であるのに対して、ヘンリッヒの自己意識理論は「自覚的生の人間学的理論」

の最初の体系」(GA III/2, 298)として捉える視座も抜け落ちているように思われる。たしかにヘンリッヒは各人が思弁的形而上学の構築を自ら引き受けるべきであること、それゆえ各人の自発的な思弁的思惟が重要であることを主張した。しかしヘンリッヒの思弁的形而上学の目的は、どこまでも自己意識の根拠の探究であり、現実世界における自由の実現でもなければ、この地上の世界における最高善の促進でもない。ヘンリッヒは「主観は[…]道徳的意識のおかげで、自己自身についての深遠な理解を獲得する」[30]と述べているように、道徳法則の意識でさえも自己意識の根拠を探究するための跳躍台と見なす傾向にある。それに対してフィヒテは自己意識の普遍的形式を探究するだけでなく、その法哲学や道徳哲学や政治哲学において、自由の実現のための諸制約を考察している。この両者の哲学的関心の差異を踏まえるならば、晩年のヘンリッヒの自己意識理論もまた、フィヒテ哲学の一解釈の枠を超えた、彼独自の自己意識理論と見なされるべきであろう。

おわりに

本論考では、『この自我』に即してヘンリッヒのフィヒテ解釈の変遷を追跡するとともに、ヘンリッヒの最終見解の妥当性を考察してきた。その結果、晩年のヘンリッヒが思弁的形而上学という構想概念において、自覚的生の立場から思弁的思惟を用いることで自己意識の根拠を探究したこと、ヘンリッヒの最終見解はフィヒテ解釈として必ずしも妥当しないことが明らかにされた。ヘンリッヒは「洞察」の時期と同様に、晩年も自らの哲学的思惟が色濃く反映された彼独自の自己意識理論を展開したのである。ただし、晩年のヘンリッヒの自己意識理論に関しては、次の二点がさらに検討されなければならないだろう。第一に、自己意識の根拠の究明に際して「この自我」という個体的自己意識の地平を離れないヘンリッヒは、カントやフィヒテの系譜に連なる超越論哲学者と見なされうるのか[31]。第二に、ヘンリッヒの自己意識理論の内には、フィヒテがイェーナ期の「人間精神の実際的歴史」(GA I/2, 365)[32]や1804年の二回目の知識学の「現象論」(GA II/8, 242ff.)[33]で行ったような、根拠から自己意識の体制を生成論的に説明するという視点があるのか。これらの問いに答えるためには、ヘンリッヒの1982年以降の著作を渉猟する必要があるが、それは本論考の趣旨を踏み越えるものである。しかし本論考では少なくとも、晩年のヘンリッヒと

である(vgl. S. 307)。

30 Henrich, *Denken und Selbstsein*, *op.cit.*, S. 127.

31 この問いを検討する際、フィヒテによる次の定義は一考の価値がある。「独断論は超越的であり、飛び越し、意識から外出する。観念論は超越論的である。観念論は意識の内部に留まるが、しかしいかにして外出が可能であるかを示す」(『新方法』GA IV/3, 335.)。

32 イェーナ期知識学における「人間精神の実際的歴史」が、経験の根拠を生成論的に説明するために導入された方法論的概念である、ということに関しては以下の研究を参照。Cf., D. Breazeale, *Thinking Through the Wissenschaftslehre*, Chapter 4: “A Pragmatic History of the Human Mind”, Oxford, 2013, pp. 70-95.

33 Schnellによれば、1804年の二回目の知識学の「現象論」は「第16講」から始まる。Vgl. A. Schnell, *Die Erscheinung der Erscheinung. J. G. Fichtes Wissenschaftslehre von 1804 – Zweiter Zyklus*, Frankfurt am Main 2023, S. 126.

フィヒテの交錯点を描き出すことはできたと言えよう[34]。

[34] 本論考はJSPS科研費21K12836ならびに23KJ1409の助成を受けたものである。